孤独な愛され女王蜂

１０

孤独な愛され女王蜂　　１０

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19517827

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース, 濁点喘ぎ, エク霊, 受けの浮気

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番はエク霊です。♡喘ぎ、濁点喘ぎ、受けの浮気あり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

孤独な愛され女王蜂　　１０

眠る芹沢の腕の中から抜け出して。
俺は最高に後味の悪い賢者タイムを味わっていた。
もう２度としない。
抱かれてる間は満たされるが、終わったらヨシフへの罪悪感と、ヨシフじゃない寂しさで泣きたくなる。
代わりにもなりゃしない。タチの悪い酒みたいだ。最悪の二日酔いを味わっている。

こんなの、相手にだって悪い。

俺はテルくんの部屋に戻って、寝ているテルくんを起こさないように気をつけながらスウェットに着替える。
テルくんが敷いていてくれた布団に包まると、ぶわっと涙が溢れてきた。
「よしふ……っ」
何で泣いてるのかも分からない。
ただただ、寂しかった。
好きな人に会えない。
それがこんなにキツいなんて、俺は知らなかった。

※

「なあ芹沢、今日飲みに行かね？飲むだけだけど」
飲むだけ。飲むだけだ。セックスはしない。俺は固く誓って声をかける。

ああ。
俺は最低だ。

芹沢の気持ちを知って、俺からの誘いなら喜ぶだろうと打算的に声

をかけて、自分の寂しさを埋めようとしてる。
案の定芹沢は喜びを顔全面に表したが、はっとしながらエクボを見て、ガッカリした顔になった。
「すみません、俺、今日は先約があって……」
「そ、っか。なら仕方ないな……」
寂しい。
誰か。
「なら俺様が付き合ってやろうか？」
すぃーっ、とエクボが何でもない顔で俺のそばに飛んでくる。
「たまにはナッツが美味いバーに行こうぜ。丁度行きたいところがあったんだよな」
なら、丁度いいか。
エクボの誘いに頷く俺を、何故かトメちゃんが複雑な顔で見ていた。

※

「ボンベイ・サファイア・ジンをロックで」
バーのカウンターに座った身体を借りてきたエクボは、綺麗な青色の瓶の酒を注文する。
「……美味いぞ、味見するか？」
じっとエクボの動きを見ていた俺に気がついて、エクボがグラスを差し出してきた。
俺は頷いて、少しだけ、水晶みたいな氷が浮かぶグラスを舐める。
柑橘系の香りと、複雑なスパイスの刺激に爽やかな甘さが流れ込んできた。が、酒気の強さにうっと引いてしまった。
「はは、お前さんには強かったか。ジュースみたいなのの方がいいだろ。マスター、カルーアミルクを」
初めて飲む酒だ。
「俺、レモンサワーにしようかと」
「まあ、美味いから飲んでみろ」
炒ったばかりのバターピーナッツを美味そうに齧りながら、ミルクコーヒーみたいなグラスを勧められる。

刺さったストローから一口飲んで。
「……美味しい」
さっぱりとしたカフェオレの風味の中に、優しい甘さがじんわり染み渡る。上等なケーキのようにほのかに洋酒が香って、心地よい。

これだけ度数が低いのなら、安心して飲めるな。

俺はエクボの勧めるままに、ジュースみたいなカクテルを何杯も飲んで。

「あっ♡あぁっ、イイっ♡」

気がついたらエクボにハメられていた。

「ぁんっ！♡」
力強く犯されて身体が素直に跳ねる。
ええと。思ったよりも酔って、足にキてまともに歩けなくなって、エクボの肩をかりて、それから、それから……
だめだ、思い出せない。
「えくぼっ♡だめ、やめて……っぁう♡」
ぎゅ、と性器を握られて、強くて甘い痺れにエクボの背中に思わず爪を立てる。
「やっと正気に戻ったか。ったく、ヨシフヨシフうるせぇよ」
覚えのない事で余計に赤面する。
「エクボ、悪い、俺もう、こういうことは……っ」
必死に抵抗する俺に、す、と表情を削ぎ落としたエクボが、ずいっと耳元に口を寄せてきた。
「好きだ、霊幻」
ひゅ、と喉が鳴る。
「ずっとずっと好きだった。……お前が俺たちに気がないのは分かってる。身体だけでいいんだ。俺たちにもお前を愛させてくれ。愛しい俺たちの女王蜂、どうか、俺たちに慈悲を……」
動けなくなる。身体から力が抜ける。抵抗できない。エクボの気持

ちを考えて、思考が止まった。
「わ、かった……っぁん！♡」
激しい抽挿が再開する。快感の波に理性が流されていく。
「はっ、はぁっ、は、う、イ、く……っ！」
規則的に押しつぶされる前立腺が、確実な絶頂を何度も叩きつけてくる。
「しぬ、しぬぅ……っ♡」
絶頂で痺れる身体を暴かれ続ける。エクボが何度か出したのだろう、ぐちゅ、ぬぽっと卑猥な音を立てる後孔が、耳からも俺を犯してくる。
「──しんじまえよ。こっちにきたら俺様のモノだ」
はう、と甘い息を吐いたら、じわりと快感で涙が滲んだ。
「あ！」
何度も甘イキを繰り返してきた身体が、ぎくりとこわばる。
「え、ぇく、えくぼっ、くる、おっきいの、くる……っ、」
じんじんと手足の先から鼓動するような絶頂感がせりあがってくる。
「──イっちまえ」
エクボの動きは止まらない。
その規則的なピストンが、俺の身体のスイッチを快感の方へ、今、バチンと切り替えさせた。
「────っ！♡♡♡♡」
バチバチと頭の中で火を付けたばかりの線香花火がいくつもスパークする。
「あぁあああぁああぁあ゛っ！♡♡♡♡」
ビクンビクンと何度も身体が跳ねた。
「くくっ……そんなにしゃぶるなよ」
思わず全身で抱きついた俺に搾られて、余裕のないエクボの顔が絶頂に歪む。
「はひ……っ♡はぁうん……っ♡」
まだ絶頂が引かない。まばたきできない目から涙が何筋も垂れて落ちた。
「気持ち良かったな、レーゲン？」

俺はこくこくと頷く。
「もっと死ぬような目に遭わせてやろうな？」
エクボが足を抱えなおすのに俺は目を見開いて。
もはやあまりの快感に恐怖を感じて。
「っっあ゛んっ！♡♡♡」
思わず逃げようとした身体を引きずり下ろされて、ぱちゅん、とまた穿たれたのだった。

※

エクボの腕の中で目覚めて。
「う……っ」
二日酔いと、どろっと内部から出てきた精液に身震いした。
俺はミネラルウォーターを手に取って、アフターモーニングピルを飲んだ。
「……なあ、霊幻」
「起きてたのか。てめーゴムぐらいしろよ」
「……昨日俺様がお前に飲ませたカクテルは『レディーキラー』っつってな。度数が高めなのに口当たりがいい酒だ。……俺以外に勧められても飲むなよ」
それだけ言って、また眠るエクボに呆れる。
「……この野郎」
油断ならない悪霊である。俺はため息をついた。
「……ん？」
なんだろう、この違和感……。
俺はアフターモーニングピルのシートを眺める。
結局理由は分からず、俺は首を傾げてピルをしまった。

※

「……」
凛々しい顔をしたサングラスの女性が、手元のメモを確認しながら調味市から離れたカフェに入っていく。

女性はカウンターに座っている、タバコで一服している男性の隣に
座った。

「……何の用だ」
女性はピクリと震えて、サングラスを外す。
「やっと見つけたわ。話があるの」
く、とタバコを手に挟んだ男性――ヨシフは、皮肉そうに笑った。
「さすがアルファだな。よく俺を見つけられたもんだ――トメ先輩」
「霊とか相談所では人探しなんかもするのよ。まだ教えてなかった
わね」
きゅ、とトメは手を緊張したように握る。

「お願いヨシフさん、霊幻さんと別れて」

ぽろ、とタバコが落ちた。

続